第四章　多摩川の漁業

目次

一　概観
二　漁法
　Ⅰ　網漁法
　Ⅱ　釣漁法
　Ⅲ　その他の漁法
三　まとめ

一　概観

青梅市の東部から漸く関東平野にはいった多摩川は、一部を羽村の堰で分流し、本流は福生市の西部を秋川市堺にぬけ、途中平井川をあわせたあと、拝島橋あたりで五日市から流れてきた秋川を合わせる。奥秩父笠取山の水源を出て、奥多摩湖で休んだ流れが、青梅市域山間部を通過する間を上流とすれば、二子の渡し、溝の口あたりから羽田の河口までの広々とゆったりした流れは下流であり、中流は羽村の堰や鵜飼で有名な日野橋の辺、そして分倍河原の古戦場を経て矢之口の渡しあたり、ということになるであろうか。さしずめ福生市は、中流のなかでも上流部に位置し、漁業組合の操業範囲も、羽村の堰から上流部の青梅組合と、拝島から上流の――支流秋川の五日市組合にはさまれた区間にある。

現在、漁業を専従にしている人はいないが、戦前までは二〇人程の人が、夏場漁業に従事し、得た鮎を近在の魚屋や料理屋におろしていたという[1]。その当時の漁獲はやはりアユが主であり、次いでマス（ヒメマス、ニジマス）、コイ、フナ、ウナギ、ハマベ（バカッパヤ[2]）、ヤマメ、ナマズ、カジカ、それにドジョウ（砂もぐりドジョウ、オババ）といったものであり、そのほかにセイ、ギョバチ、コトウといった雑魚を獲っていた。しかし石川達三の小説『日陰の村』でもとりあげられたように、戦前から戦後にわたって長い間かかった奥多摩ダムが建設完成されてからというもの、当然の如く下流の漁種に影響がで[3]、生息量も激減し、戦前程の収獲は全くなくなってしまったという。

二　漁法

漁業をどのように分類整理してとらえるかは、はなはだ難しいところであるが、ここでは、市内の古老から聞き得た漁法を、簡単に網漁法、釣漁法、その他の漁法に三大別し、右の分類にわけて漁法を述べるとともに、関係の深い羽村町、およびその上流で中流域の上部に位置する青梅市の漁法も若干参照しておきたいと思う。ちなみに中流域でも下流に近づくと[4]、川幅も広くなるうえ、よどみも増し、舟漁が出現してくる。

Ⅰ　網漁法

市内で確認し得た網漁法のうち、最も規模の大きいのはヨセアミ（別名ヨセカワ、またはオオリョウ）であり、五、六人以上の者が組んで従事し、時には客寄せをしたという。次いでセアミ（別名セバリ）、マサアミ、ヒルテン、トアミがあるほか、アガリ、クダリといった漁法もある。ブッテェも行なわれていた。

(a)ヨセアミ

二百メートルほどの流域を漁場とし、鮎を獲るのが主であるが、そのほかの雑魚も一緒に獲る。旧福生村永田で長い間漁業をして

きた細谷勝雄さんからの聞き書きによると、まず事前に、上流の一方の岸辺に、六尺×九尺ほどの間仕切りを、最も目の細かい①タテアミ（絹アミ）で袋状に形作り、そこから他方の岸辺に、普通の目の②タテアミ（麻アミ）を張って流れを寸断する。①に目の細かい絹のアミを使うのは、下流から追ってきた魚をここに押し込むため、第二に魚が逃げないこと、そのためには丈夫なアミでなければならないからであり、話者によっては、竹で編んだスで堰をし、スの下は砂まきにして魚がもぐらないようにしたという。あるいはスの下にドウを据えたともいう。②は熊川の方では木綿のシロアミを使ったともいう。

アミには、材質によって、絹アミ、麻アミ、木綿アミの三種類があり、柿の渋で水の切れをよくするとともに丈夫で長持ちさせるタテアミと、渋をつけないシロアミとがあり、漁法によって使い分けられている。アミの目には、三分、五分、一寸とあり、細かい目というのは三分を指すようである。

仕切りをしたら、百ないし二百メートルほど下流から、数人の人間が川の中に入って追い立ててから、普通の目の③タテアミ（麻アミ）を張り、魚が下流へ逃げないようにする。熊川の方では、③は下にオモリのついた高さ二メートル、長さ三〇～四〇メートルほどのシロアミ（木綿アミ）を上流にクキアゲたという。

③と①・②の間には、三・四尺巾の④シロアミ（木綿アミ）が底にひろげられており、魚はそれを嫌ってますます上流に逃げるので、下流から追ってきた③をシロアミの上流部にたて、また④を③の上流部に張って追いたて、その後また③を張るといった具合に何度かくり返して、①の囲いの部分に追いこんで四角にかこうのである。熊川方面ではこのくり返し作業はせず、上流部に④シロアミ（木綿アミ）を二、三枚川底に張っておく。下流からクキアゲてきたら、その③を④の下流部に固定しておき、追いこんだ魚を逃げないようにする。追われてきた魚は、シロアミを嫌って、ますます上流へ逃げるので、頃合を見計って、下流部のシロアミから順次たててゆき、①の囲いの部分に追いこんでゆく。これをタテコミといい、最後のタテコミには目の一番細かいアミを使う。

囲いに追いこんだら、その中に静かにトアミをおろし、数回にわたって獲る。これは福生も熊川も同じである。

(b)セアミ

これは鮎を獲るのが目的である。漁業組合法で決められた期間内（鮎の解禁は六月一日[5]から九月十五日）に行ない、その方法[6]は鮎の習性をうまく利用したものである。

まず瀬のあるきれいなところに、適当な間隔で杭をたて、四尺間隔ほどに稲藁を吊り下げた縄を張る。これをオカザリという。岸辺側には、一方または両方にタテアミ（下部は麻、上部は絹、あるいは麻だけ）を張り、川底部を石で押さえ、モジ（モジリとも言う）を五・六個設置する。アミはシロアミでは魚が逃げてしまうので、必らずタテアミを使い、誘い口には三尺ほどのアミの折り返しを流しておく。これをアゴという。

鮎は頭を上流にむけてさがってくる。さがってくると尾がオカザリにぶつかっておどろき、上流にもどる。これをくり返しているうちにアミの方におりてくる。アミに尾がかかるとまた上流にむかうが、アゴにぶつかって今度は横に逃げる。そこにモジを置いておくので、その中に鮎は入る。

(c)マサアミ

これも鮎が目的であるが、鱒も獲る。夏も冬も行うというが、冬の方はヒルテンという漁法になるかと思われる。夜にアミを仕かけ、翌朝獲る方法で、あまり流れは急でなく、淀んだところの深さ六尺ぐらいまでのところに、竹竿にウキのついているアミ（これをマサアミという）を結びつけ、流れを寸断するように直角にたらして竿を抜く。オモリが下についているので、アミはゆらゆらと立ち泳いでいることになる。オモリのことはヤと呼ぶ。トアミはヤの目方で言い分けるという。一晩たってから、アミに引っかかっているマスやアユを獲る[7]。

(d)ヒルテン

冬場の漁である。ホンバヤ、コトウなどを獲るのが目的で、昼間のうちに魚の寄ってくる深みを探しておき、その深みの両端も

しくは片側にアミ（これをヒルテンと言う）を張っておく。マサアミと同様竿にアミをかけて夕方張り、夜になって動いた魚がアミに引っかかったのを翌朝明るくなってから獲りに行く。

このアミは、マサアミもそうであろうが、渋をつけた絹アミで、ヤは棒状の鉄もしくはトアミのナマリをつけ、ウキは直径四センチ巾一センチほどの桐の枝を四〇センチ間隔につけたものである。

(e)アガリ

クダリもそうであるが、この漁法は(d)のヒルテンと同様深みの前後一方に、頃合を見計ってアミを張る。張る場所は魚のはね具合で、鮎のアガリ、クダリを判断する。これが漁法の名称になっているのであるが、方法の違うのは、アミの下にモジをならべ、そこへ追い込むように、川面を棒でたたいて鮎を追うのである。ちなみにマサアミ、ヒルテン同様、一晩アミを設置しておき翌朝あげる方法もとられていたという。

(f)ブッテェ

足で追いこんで雑魚などをすくいとるのであるから抄漁法であり、掬い網の一種である。材料は細く切った割竹をスに編んで、一方の端の両端を柄に結びつけ、他方の端の両端と柄の先端とをシュロなどで吊った漁具である。

以上が主な網漁法であるが、ここでアミについて少し記しておきたい。すでに述べたように、アミの材料には絹、木綿、麻の三種が用いられ、主に糸を買って来て作ったのであるが、自家用の養蚕の糸をヨリ屋に持って行ってよってもらい、冬場それを加工して利用した人もいた。絹アミを使うのは、まず第一にトアミであり、ヒルテン、ヨツデアミやヨセアミの時である。木綿アミ、麻アミはヨセアミに使う。麻アミは糸が太いので魚に知られると言い、ヒルテンなどには使われない。また麻アミには、すべて渋をつけ、シロアミにはしないという。渋をつけるのは簡単で、渋のはいった桶の中にアミを浸し、その後軒下などに吊り下げて天日で干すだけである。パリパリがとれて柔らかくなった時が渋の切れた時で、こうなったらまた同じように渋を塗る。

さて渋の取り方であるが、渋柿のなかでも丸いオオシブという柿の方が、長っぽいツルッコよりも渋が強いので、これを使う。まだ実の熟さぬ八月中に柿をもいで、一粒ずつ四分程度に割る。刃物は使用せず、金槌で割ったり、臼の中に入れて杵で割る。一粒ずつ割るのは、いっぺんにやるとシブがのめっこくなって柿が飛び出すからである。つぶした柿は四斗樽に七分目ほど入れて、水をそれより多めに入れ一晩放置する。翌朝、柿をあげて木綿の布でこし、こしたものをビンもしくはカメに入れて密閉しておく。これを一番手という。とった柿はまた四斗樽に入れて一晩の上置いておく。これは渋の出が悪くなるからであり、その後柿は捨て、液は使用するまで密閉しておく。これが二番手である。渋は半年もたつと自から小豆色に変化するという。

渋は、漁網に塗るほか、こわれた箕に紙を張ってその上に渋を塗って使ったり、シブ紙に塗って補強したり、箱に塗ってすき間ができるのを防いだりする。

II 釣漁法

釣漁法のなかにも、視点のおきどころによっていろいろと分類の仕方がある[8]。まず竿を使うかどうかによって、直接漁法、間接漁法あるいは一本釣漁法、延縄釣漁法といった具合に分けられる他、餌を使うか使わないかによってもやはり分類できるし、そうなると囮鮎の漁法や擬餌を使用する例もでてき、必らずしも簡単には分類できない。しかし市内で聞き得た限りでは、延縄釣漁法としてはナガシバリ一方法しかないので、まずこれを説明してから、一本釣漁法を餌の点から分類しながら説明してみたいと思う。

(A)延縄釣漁法

(a)ナガシバリ

これは単純な方法で、川の流れのあるところに、三～四尺ほどの縄の両端を固定し、その縄に針[9]のついたミチイトを五～六本もつけて流しておく。餌はミミズもしくは小魚であり、獲れるのはウナギ、ナマズ、ギバチといった類である。

(B)一本釣漁法

聞き得た範囲では、エサを使うのはペッチャンコ（またはタタキ、

ウチヅリとも言う）とアナヅリであり、擬餌とも言うべき毛針を使うのは、クイバリ、セヅリ（カバリ＝蚊バリ＝毛バリ）、ドブヅリであり⑩、エサをつけないで針だけを操作して釣るのがコロガシ、サクリ⑪、ヒッカケ（カギバリとも言う⑫）であり、トモヅリ（以前はオトリと言っていたという⑬）は囮鮎をつける。

(a)ペッチャンコ

この漁法は、春から秋にわたって比較的長い間利用された漁法で、主に夜明けから明るくなるまでの間を、日没から暗くなるまでの間に行なわれた。漁獲はハヤが専門で、浅瀬に石を置き、石の川下にサナギを乾燥させて粉にしたエサをまき、六尺ほどの竿にエサをつけない針を六尺ほどのミチイトの先につけて、何回にもわたって打ち込む漁法である。どうやらペッチャンコとかタタキというのは、右に言ったような浅瀬でやる方法を言い、ウチヅリが多少ヨドミのあるところで行なわれた方法を指すようで、この時には毛針を用いたとも言う。

(b)アナヅリ

川瀬を変える際に出す突き出しのことを、その形によってカメノコ、ゴハン、チンショという。この中にあいた穴に住んでいるウナギを釣るのがアナヅリである。漁具はただの棒に麻糸と針をつけ、エサはミミズなどをつけて下げておく。夕方たらしておき、翌朝引き上げに行く。子供の遊びである。

餌を用いた例は右しか聞き得なかったと言ったが、鯉や鮒を目当にする時の一本釣などもなくはなかったが、生計の一助にしていた人々にとって、このような方法はとられなかったようである。また子供の遊びに、ハヤを相手にしたアンマがある。名称の起源は、言うまでもなく盲人按摩からきたものであり、釣っている格好は杖をついた按摩の姿に酷似している。浅瀬で行なわれる方法で、七尺前後の竿にやはり七尺ほどのミチイトをつけ、エサは川虫やサシをつけ、オモリもウキもつけず、竿の先を川底にすりこむように、前後に休まず移動させて、エサが生きているかの如く見せる。

(c)クイバリ

瀬によって違うが、下に沈む程度のオモリをつけ、針のまわりには虫にまねて作った擬餌をつけて水中にたらし、それをあげたりさげたりして釣る方法である。

(d)セヅリ

これもクイバリと大差なく、クイバリの小さいのを七～八本つけて軽いオモリにウキをつけて、流れにあわせてカミからシモに流してゆく方法である。獲れるのは、主にハヤ、ヤマベ、時には鮎もとれる。

(e)ドブヅリ

これは専ら鮎を獲る際に用いられる方法で、トモヅリと並んで鮎釣りに最高の醍醐味あり、とせられている漁法である。やはりエサはつけずに、カバリを四匁ほどのオモリの上下につける。当然の如く上の針をウワッパリと言い、下の針をシタバリという。針は何種類もの毛針を用意し、その日の天候や川瀬の勢い、気分によって変えてゆく。ヤツハシ、オソメ、オソメノニノジ、モモボカシ、アケガラシ、ゴロウ、アカエビの金と銀、といったように、様々な形と名称がついているが、針が気に入られると何匹でも鮎が釣れるという。方法は陸の上から静かに竿をたらして、川底から水面までの間を上下させるのである。

(f)コロガシ

これも鮎専門である。鮎が大きいようであれば、大きめのコロガシバリをつける。名前の如く、川底をころがす漁法であるから、オモリは五匁よりも重いものを使い、針は十本ぐらいつける。

(g)サクリ

これも鮎が相手であるが、岩場などの魚影の見える場所を選びイカリバリを数本つけて（エサはつけない）川底におろしておき、魚が泳いできた時、急に引き上げて、引っかける方法である。

(h)ヒッカケ

サクリと違うのは、釣り人が川の中に入り、メガネを通して魚影を追うことと、各自が工夫したカギバリを用いて、泳いでいる魚をひっかける点である。

(i)トモヅリ

鮎の習性をたくみに利用した漁法で、鮎釣りには最も人気がある。鮎はナワバリ[13]意識が強いので、そこへオトリアユを入れるとそのオトリを追うので、仕掛け針にかかることになる。場所的には石アカ[14]のついている瀬を選ぶことが肝心だという。

以上が釣漁法の概観であるが、これらの方法をみていると、昔いかに魚が豊富であったか察せられる。このことは、その他の漁法でより一層感じられる。

Ⅲ その他の漁法

ここにはいわゆる特殊漁法あるいは原始漁法という名称のもとに分類されるものがはいる。簗漁法[15]・梁漁法・鵜飼漁法等がそれである。すでに釣漁法のところで述べたヒッカケなどは、覗突漁法として分類してもいいであろうが、モリ漁法だけこの範疇に入れておきたいと思う。しかし、すでに見てきたように、漁具は常々複合して用いられる。

(a)セボシ

雑魚を獲るのを目的とする。増水後、本流から分かれたコガワ（小川）をせき止め、一ケ所水を流す口を開け、そこにドを張る。川巾が狭くて落差があればヤナをかける。ヤナは竹を巾狭くうすく切って、目を細かくして麻糸で編んだものである。

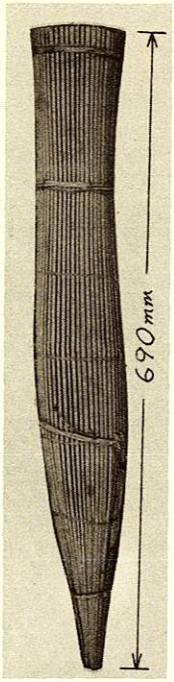


写真1 ウドー

(b)カリコミ

冬場の漁である。セボシと同様漁業法で禁止されている。本流からそれたヨドミに、木の枝や草を入れて一ケ月ぐらい放置しておく。寒さをさけようとする魚を獲るのが目的で、草を取りはずす日には、逃げられないようにスヤドを張った[16]。

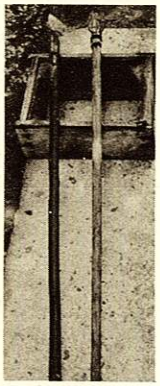


写真2 モリ・水眼鏡

(c)カジカドリ

冬場の漁である。水の少ない時でもあり、寒さで動きがにぶくなっているカジカのかくれている石をおこして、モリで突く。

(d)アーコ

これも冬場、しかも三月の頃の漁である。カジカのアーコと言って、卵を指す。アーコは黄色い色をして石に付着している。近くには必らずオスのカジカがいるので、モリで突いたり手づかみで獲る。

(e)イシブチ

子供の遊び[17]で、夏場の昼間にやった。川瀬の浅い石の下にいる魚を獲る方法で、魚のいそうな石をカンで探し、その石に適当な石をぶつけておどかして獲る。

(f)カワクラ

アユをはじめ、ウナギ、ハヤなどの雑魚を獲る。大きめの石を水中に山積みして数日放っておく。その後、スでこの石のまわりを囲い、入り口一ケ所に直径一尺以上もあるバカドウを置き、中の石を全部外に出す。すると魚はバカドウの中に入るのでそれを獲る。あるいは手でつかまえる[18]。

アユは石のアカをなめるので、新しく積んだばかりのカワクラには入らない。数日間、放っておくのはこのためである。

(g)オケブセ

半分に切った醤油樽に蓋をし、その一部に竹をさす[19]。樽の中にはサナギをつぶして土で練ったものを入れ、竹筒から臭いを出し、魚を樽の中に誘い込む。この竹筒をアゴという。樽は川底に埋め、アゴだけ水中に突き出すようにし、しかもアゴの口が水面から三～四寸ほどの浅瀬に仕掛ける。ハヤ、ヤマベを獲る。

(h)テンノウドウ

漁具が違うのみで、原理はオケブセと同じである。漁獲も同様で、エサもサナギを使う。適当な木箱の上部に蓋をし、石で押さ

え、中にエサを入れる。川下にむけて竹で編んだ開閉自在の蓋をしつらえる。これをやはりアゴという。そこから臭いが出、その臭いに誘われて、魚がアゴを押して入ってくるような仕組みになっている。この箱――テンノウドウを瀬から上げて魚を獲る時に気をつけないと、アゴが開いてしまい魚に逃げられてしまう。

(i)鵜飼

聞き書きの範囲では、市内で鵜飼を行なった痕跡は認められなかった。ただし熊川の下流で、大正時代に他所の者がきて鵜飼をやっているのを見たことのある人が、数える程であるがいる。しかし享保十九年の福生村「村指出シ明細帳下書」には、

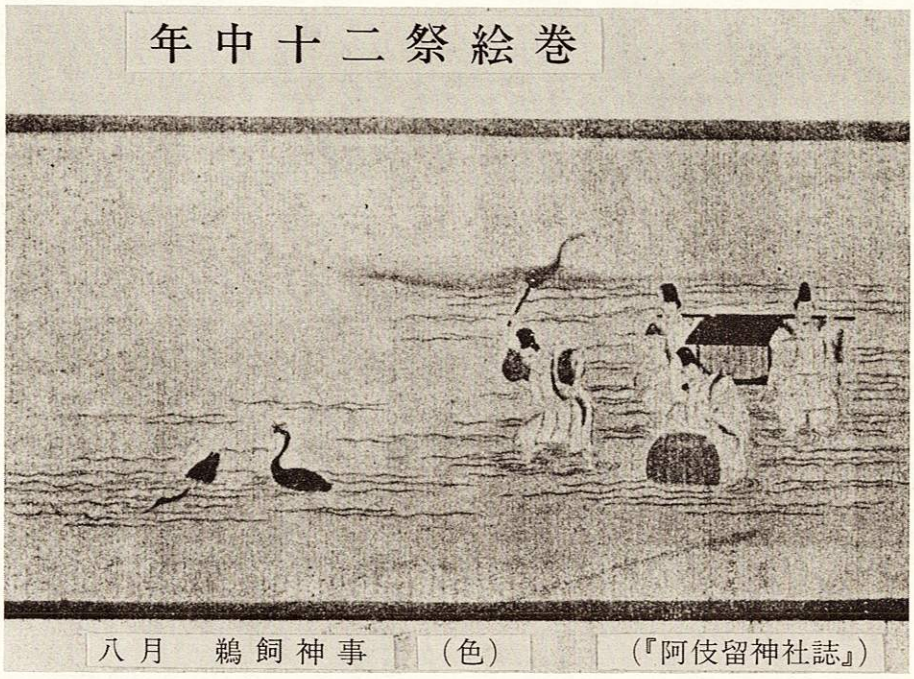
一　鮎猟師　弐人　佐次右衛門
　　市左衛門

一　鵜四羽御座候

とあるので、当時鵜飼を行なっていたであろうことが証明される。少し下流になるが、柴崎村（現立川市）では、享保七年以前から、幕府に献納した御菜鮎を、鵜飼漁法と網漁法で獲っていた[20]というし、享保よりちょっとくだった弘化四年の「鮎漁争論一件記録」には、支流秋川流域の伊奈村（現五日市町）に、鵜漁人がいたことを伝えている[21]。

同じく五日市町の延喜式内社阿伎留神社の年中十二祭のうち、八月上旬には鵜飼神事があり、秋川より獲った鮎を神前にそなえたといい、その様子を記した年中十二祭絵巻も存する[22]。この鵜飼神事がいつ頃から行なわれてきたものかは起源不祥とのことであるが、絵巻は狩野久信の描いたもので、天保から幕末の頃のものであるという[23]。その絵によれば、神人らしい一人が松明を持っているところから夜川のようであるが、船は使用しておらず、明らかに徒鵜（かちう）である。八月の行事であることから察して、夏場を漁期としたのであろうが、一般に多摩川の鵜飼は、夏の昼川で徒鵜ということになっており[24]、その点この絵巻の意味するところは大きい。

吾妻鑑巻十六、正治二年七月一日条には、相模河の鵜飼の存在を記しているが、夫木和歌集巻八「鵜飼」には、玉川の鮎につい



八月　鵜飼神事　（色）　（『阿伎留神社誌』）

図Ⅰ　鵜飼神事

て詠んだ歌が二首みえている。この歌が実景であるとすれば、多摩川の鵜飼も相当古くさかのぼれることになるが、確実に証明できるのは、現在のところ享保年間までである。しかし、江戸時代の多摩川の鵜飼は相当有名だったらしい。[25]

三　まとめ

以上が、福生市内で聞き得た漁法の大体である。多摩川流域全体にわたって漁法の分布をマッピングしてみると、地域差が出て面白いと思われるが、今後の調査と報告を俟つしかない。

註

(1) 獲った鮎は、近くの籠屋が注文に応じて作っているアユカゴに並べて売りに出す。

(2) 人によっては、これをオコゼと言う。川崎市多摩区では、ヤマベ、ヤマメのことをオコゼと言い、登戸付近ではガンガラと呼んでいるそうである。（中村亮雄「菅の漁 ― 多摩川中流域の漁撈聞書 ―」『川崎市文化財調査集録』8所収）

(3) 鮎は「上流域の下部から下流域の上部」までに棲息するといわれている（宮地伝三郎『アユの話』六八頁）。春に川上から上ってきた鮎は、青梅市域までさかのぼったが、明治三七・八年頃から徐々に遡上が見られなくなり、大正二年以降は琵琶湖の稚鮎を放流するようになった（青梅市郷土博物館『民俗展シリーズ5　多摩川の漁撈展』、宮地前掲書）。羽村の堰下が遡上鮎の行き止まりとなって、一大漁場を成していたことはとつくに知られている（『羽村町史』三六七・三七五頁）。

④ たとえば、中村前掲論文。

⑤ 川崎市多摩区管では、この日水神祭りと言って、漁師仲間が集まって酒を飲んだという（中村前掲論文二頁）。

⑥ 青梅市域ではこれをシラアユもしくはシラガケと言い、オカザリにはウラジロなどを使っている（青梅市郷土博物館前掲パンフ）。羽村ではヘヤアミと言い、春の上り鮎をとる漁法として説明されており、群れ鮎が遡上してきた時、オカザリに触れて左右に逃げ戻ったところを、ヘヤアミに誘い込んでモジに誘導する漁法である。（『羽村町史』三七九―三八〇頁）。

⑦ 青梅市域ではこれをナガシアミという（前掲パンフ）。

⑧ 釣漁法については、渋沢敬三『日本釣漁技術史小考』が詳しい。

⑨ この針をナガシバリと言うが、青梅ではカエシのないウナギバリなどを使った（『青梅市の民俗』第一分冊二一一頁）。なお、鈎の種類については、すでに遠く先史時代からたくみに機能分化されている（渡辺誠『縄文時代の漁業』）が、本稿では詳しく触れる必要もないであろう。

⑩ 羽村ではこれを瀬っ引きとも言う（『羽村町史』三八一頁）。

⑪ 羽村ではこれをかき出しとも言う（同右）。

⑫ 羽村ではこれをゴロ引きとも言う（同右）。

⑬ ナワバリの範囲は一平方メートル以内で、行動範囲は二～三平方メートル以内という（宮地前掲書三三頁）。

⑭ これがアユの食物であり、ナワバリはこの石に付着している藻類によって成り立っている（宮地前掲書）。香魚と言われる所以もここにある。

⑮ 青梅市域では、瀬の上流と下流にスを張り、それぞれにウケをふせ、その後本流からの流れこみをせき止めて水流に変化をおこし、それによってウケに入った魚をとるという（前掲パンフ）。羽村では、冬場はあまり水を干さないで川下と川上にアミやスを張り、水をおとして川下の筌でとり、夏場は川上と川下にスを張り、川下にヤナ、川上に筌を仕掛けて素早く水を干して獲る、と報告されている（『羽村町史』三八二頁）。

⑯ 青梅市域では、これに似た漁法をカゴブセもしくはササブセと呼んでおり、単に草木をつめこむのではなく、クズハキカゴの周囲をムシロでおおってから葉や石をつけて淵に沈め、半月から一ケ月後にそれを引き上げている（前掲パンフ）。

⑰ 支流秋川の上流五日市町戸倉では、子供達が「小石の下にい

るカジカやハヤを手でつかまえたり大きな岩の穴の中に手をさしいれて、ギバチやハヤを握りとる」ヒンニギリが報告されている（最上孝敬『原始漁法の民俗』六―七頁）。また、青梅地方では、この摑みとり漁法のことを、ガマ握りと言っている（『青梅市の民俗』第一分冊三一一頁）。

⑱ 青梅市域ではこれをイシグラとも言い、夏場と冬場の両様があったらしいが、その漁法には地域差がある。（『青梅市の民俗』第一分冊二〇八～九頁、および二一五頁）。羽村では、夏の土用前にするのを石川倉（あるいは石倉）と言い、冬にやるのを冬川倉と言っている（『羽村町史』三八一―二頁）。その漁法には青梅、羽村、福生と、多少の地域差が見られる。

⑲ 青梅市域では漁具の作りが少し異なっており、桶に布を張り、タガでとめる。布の一部に斜めに切った竹筒を縫いつけておき、そこからエサが流れ出るようにする。竹は布よりも上に出さないようである（前掲パンフ）。

⑳ 『立川市史』下巻六四一頁。

㉑ 同　右　六八五頁。

㉒ 『阿伎留神社誌』六頁。

㉓ 阿伎留神社宮司、阿留多伎弘氏からの筆者宛書翰による。

㉔ 先ほどの「鮎漁争論一件記録」は、ヨカワを行なったところに事件の発端があった。

㉕ 佐々木信綱『増訂賀茂真淵と本居宣長』に紹介された真淵の「ふぶくろ抄」（年次―明和元年頃カ）のなかに、次のような記事がある。

いかゝさわぎ行き給ふにや。おのれ此七日に玉川へいきて、八日の夜ふけて歸り侍り。道のほど珍らしう、かしこの川はよに清き水の浅う早う流れて、河原も清き石のみなれば、京の嵯峨の大井桂などおぼゆめり。むかうに、限りなく長き山の、高からず續きたる。かの玉の横山てふは是なりけり。鮎も多くて。されど、其日はおほやけの召ありとて、あたりへ鵜などは放たさせず。さでなどして、少しのみとり侍り。常は多く得るといへり。よりて魚はもてかへらず。くだ物少しつとに参る。

どうやら真淵は、上納鮎を獲る日に出くわしたらしい。また享保元年頃に完成したと思われる加藤千蔭の『萬葉集略解』十九には、万葉集の歌四一五六～八を次のように注釈している。

さて越前越中にては、多く川へおりたちて、鵜を飼うとぞ、ここの多摩川なども、川瀬浅ければ志かせり。